漢語複合名詞に接続する複合助詞

九州大学文学部人文学科
言語学・応用言語学専門分野
2010（平成 22）年入学
1LT10121N
平原里美
2014（平成 26）年 1 月提出

要旨

本稿では、出来事の連動を表す複合助詞「～とともに」「～につれて」の前件について論じ、複合助詞「～とともに」、「～につれて」が名詞句に接続する例の中でも容認度に差があり、「N の NV」漢語複合名詞を前件要素とする場合は容認されるが、「N NV」漢語複合名詞を前件とする場合は容認されないと主張する。これまでの先行研究では、前件として動詞句と名詞句をとることができること、更に動詞句をとる割合が名詞句をとる割合よりも圧倒的に高いことが述べられているが、本稿で取り扱う名詞句間の容認度の差は取り扱われていない。本稿ではさらに、このような容認度の差の原因が、「N NV」のほうが「N の NV」よりも名詞的性質が強いことにあると論じる。

目次

1. はじめに **1**

1.1. 議論の対象 **1**

1.2. 問題提起と主張 **1**

1.3. 本稿の構成 **2**

2. 先行研究と問題の位置付け **2**

2.1. 複合助詞 **2**

2.2. 出来事の連動を表す複合助詞 **3**

2.3. 漢語複合名詞への接続に関する先行研究 **4**

2.3.1. グループ KANAME (2007) 4

2.3.2. 田中 (2010) 5

2.3.3. 藤田・山崎 (2006) 5

2.4. 本稿の問題の位置付け **6**

3. 調査 **7**

3.1. 目的 **7**

3.2. 調査に用いた文 **7**

3.3. 実験の方法 **8**

3.4. 結果 **8**

3.5. 考察 **10**

4. 議論 **10**

4.1. 主張 **10**

4.2. 根拠となる先行研究 **10**

4.2.1. 名詞化 10

4.3. 緊密性 **13**

4.4. 本節のまとめ **14**

5. まとめ **14**

参照文献 **16**

謝辞 **17**

付録 **18**

1. はじめに

1.1. 議論の対象

本稿では、(1), (2)のように、漢語複合名詞に接続する出来事の連動を表す複合助詞「～とともに」「～につれて」の例について論じる。

(1) a. 人口の増加{とともに／につれて}街がにぎやかになる。
b. 人口増加{とともに／??につれて}街がにぎやかになる。

(2) a. 技術の進歩{とともに／につれて}生活が便利になる。
b. 技術進歩{とともに／??につれて}生活が便利になる。

「～とともに」と「～につれて」はどちらも、「あることがらの変化に連動して別のことがらが変化する」意味合いをもつ複合助詞である。例えば(1a)の例では、「人口が増加する」ということがらの変化に連動して「街がにぎやかになる」という変化が起きることが表されている。このように意味の共通点がある一方で、2 つの形式は常に交換可能なわけではない。

1.2. 問題提起と主張

いくつかの先行研究において、複合助詞「～とともに」と「～につれて」は、「X とともに Y」「X につれて Y」のように複合助詞が表す出来事の前件を X と後件を Y とすると、前件 X に動詞句と名詞句をとること、更に、名詞句より動詞句をとる割合が圧倒的に高いことは述べられている。しかし、(1), (2)のように前件 X に名詞句をとる例の中で、どのような場合に容認度の差が出るのかは指摘されていない。

本稿では、前件 X に漢語名詞を取るものの中で、名詞＋助詞「の」＋動作名詞「N の NV」（例：「人口の増加」）(=(1a),(2a))をとる場合と、助詞「の」が付かない名詞＋動作名詞「N NV」（例：「人口増加」）のような漢語複合名詞(=(1b),(2b))をとる場合を比較し、文の容認度の違いとその要因について論じる。本稿の主張は、以下の 2 点である。

(3) 前件として「N NV」をとる場合は容認されにくいが、「N の NV」をとる場合容認されやすい。

(4) (3)のような容認度の違いが生じるのは、「N の NV」漢語複合名詞は動詞に近い性質を持ち、「N NV」漢語複合名詞は名詞的性質が強いためである。

1.3. 本稿の構成

本稿の議論の構成は以下のとおりである。まず、2 節で本稿で取り扱う複合助詞の先行研究を整理し、その問題点を指摘する。3 節以降では本稿の主張について議論する。最初に、3 節で容認度の違いに関する主張(3)を裏付けるために、容認度調査の実施とその結果を提示する。次に 4 節では調査結果を受け本稿の主張の根拠を論じる。5 節はまとめである。

2. 先行研究と問題の位置付け

本節では、複合助詞「～とともに」「～につれて」について論じられている先行研究を整理し、1 節で述べた前件の種類による容認度の違いが、先行研究の分析では取り上げられていないことを示す。

2.1. 複合助詞

はじめに、複合助詞について簡潔に整理されている先行研究として砂川 (1987) を取り上げる。「～とともに」「～につれて」はどちらも、品詞としては複合助詞に分類される。複合助詞とは、複数の語がひとまとまりになって 1 語の助詞と同じような働きをもつ形式の連語であり、例えば、下記(5)-(7)の例文の下線部分「～だけあって」「～として」「～だけに」などが複合助詞である。

(5) 小説教室の受講生だけあって、左知子の話ぶりはしっかりしていて、多少理屈っぽかった。 (砂川 1987: p.42, (2))

(6) 一枚は夫が講座取引のある銀行のカードで、ファミリー会員として友梨も作っている。 (砂川 1987: p.42, (1))

(7) これからの活躍が期待されていただけに残念だ。 (砂川 1987: p.43, (5))

砂川は、複合助詞を語構成からみて、(a) 動詞や名詞など、実質的意味を持つ語が、その実質的意味を失い、形態的に固定化して助詞と同じような機能を果たすようになったもの(=(5),(6))、(b) 複数の助詞が連結して 1 語相当になったもの(=(7))との大きく 2 つに分けられるとし、単純な助詞との違いとして「関係構成力の強さ」を挙げている。例として、「友達に告げ口された」という助詞を用いた文を「友達によって告げ口された」「友達に対して告げ口された」のように、複合助詞を使うことによって、関係構成的な意味が明確に表示できるようになるとしている。

砂川 (1987) の分類を参考にすれば、「～とともに」「～につれて」は(a)の分類になる。「～とともに」は助詞「と」に副詞の「共に」が付いたものから、「～につれて」は助詞「に」に動詞の「連れる」が付いたものから派生したものであると分析される。更に、明らかな出来事の連動は助詞では表すことができず、複合助詞を用いてしか表すことができないのは確かである。しかし、砂川が述べているのは本稿の主張に直接関係するものではなく、一般的な複合助詞の特性であるため、次節以降本稿で取り扱う出来事の連動を表す複合助詞について述べている先行研究を整理する。

2.2. 出来事の連動を表す複合助詞

本稿では、先に述べた複合助詞の中でも、下記例文(8)-(10)の下線部分のような「あることがらの変化に連動して別のことがらが変化する」意味合いをもつ複合助詞「～とともに」「～につれて」に着目し、考察していく。ここでは、これらの複合助詞をまとめて、出来事の連動を表す複合助詞と呼ぶ。

(8) 日がたつとともに、胸の痛みも薄らいでいくだろう。 (cf.グループ KANAME 2007: p.101(1))

(9) 売上高の増減につれて変動する費用を変動費と言う。 (グループ KANAME 2007: p.101(3))

(10) 人間は年をとるにつれて、忘れっぽくなるものだ。 (田中 2010: p.85(4b))

本稿で注目する「～とともに」「～につれて」の 2 つの複合助詞について、グループ KANAME (2007) は、「2 つの物事は一般的な社会現象であり、漸進的に推移していく場合、表現に意味的な差はほとんどなく、交代可能である。」としている。違いとしては、「～につれて」は、2 つの「動き」が連れ立って起こることを体感している表現であり、個人的、体感的な物事を述べるのに適しているのに対し、「～とともに」は出来事を外から客観的にとらえる表現であるため、個人的な体験については使用されにくいとしている。

(11) 読み進む{??とともに／につれて}、ぐんぐん物語に引き込まれていった。 (cf.グループ KANAME 2007 :p102(2))

(12) 刻一刻と犯行予告時刻が近づいてくる{??とともに／につれて}、捜査陣の緊張は、ますます高まっていった。 (cf.グループ KANAME 2007 :p103(5))

(13)　村の住民の高齢化{とともに／につれて}、労働力不足が深刻になってきた。

(cf.グループ KANAME 2007 :p103(7))

しかし、このような個人的・体感的 vs. 客観的という意味的な違いからは、出来事の連動を表す複合助詞の前件 X の違いが容認度に影響することは説明できない。

次節では、特に出来事の連動を表す複合助詞の前件 X として現れる要素に注目した先行研究をまとめる。

2.3. 漢語複合名詞への接続に関する先行研究

本稿で着目するのは、出来事の連動を表す複合助詞がどのような要素を前件 X とすることができるかという点である。本節では、「～とともに」「～につれて」とその前件要素の関係について論じている先行研究を整理する。

2.3.1. グループ KANAME (2007)

グループ KANAME (2007) では、複合助詞「～とともに」「～につれて」が接続する前件 X は動詞の辞書形(V る)(=(14))、動詞の「ていく」「ている」形(=(15))、「進歩」や「～化」「変動」「増減」などの「動き」を表す名詞(=(16))をとるとしている。

(14)　動詞の辞書形(V る)形

日が経つにつれて、胸の痛みも薄らいでいくだろう。

(グループ KANAME 2007: p.101, (1))

(15)　「ていく」「ている」形

山道を登っていくとともに、少しずつ眺望が開けてきた。

(グループ KANAME 2007: p.101, (2))

(16)　名詞に接続する形

a.　科学の進歩とともに、人々の生活も向上してきた。

(グループ KANAME 2007: p.103, (6))

b.　社会の変化につれて、若者の考え方も変化する。

(グループ KANAME 2007: p.105, (12))

また、(14),(15),(16a)が、X が一方向に推移・進行する出来事を表すのに対して、(16b)の例文は、X が一方向に推移・進行する出来事とは言えない場合を表すとする。

以上のように、グループ KANAME では前件 X についての記述としては、動詞句と名詞句をとることができることと、その形のみであり、本稿で問題とする前件 X が名詞句である場合の名詞句間での容認度の差は述べられていない。

2.3.2. 田中 (2010)

田中 (2010)では、前件 X は動詞句と名詞句をとり、動詞句では移動や方向を表す動詞、N 化スル動詞、ナル動詞、テイク・テクル動詞、名詞句では「回復、普及」や「高齢化、近代化」などの一般にスル動詞となる動作性名詞が多いとしているが、一般的に名詞句接続のケースは少ないようであると述べている。

(17)　移動や方向を表す動詞

診察が進むにつれて捕虜は落ち着きはじめたのか、指示通りに従った。

(田中 2010 :p.85(10))

(18)　N 化スル動詞

多くのアジア諸国で民主化が進み、経済交流が多様化するにつれて、お互いの社会の隅々まで人脈を広げることも大切になっている。　(田中 2010 :p.86(20))

(19)　ナル動詞

寒くなるにつれてコソ泥や強盗が多くなり、十数件の隣組が自衛のために、若い者を出し合って、夜警を何班か作り、　(田中 2010 :p.87(26))

(20)　テイク・テクル動詞

ゆっくりと橋を渡ってゆくにつれて、牧師館の姿は少しずつ薄れて、渡り終えたときにはざわめく崖の木々の闇しか見えなかった。　(田中 2010 :p.88(30))

(21)　動作性名詞

情報化文明の高度の組織化につれて、日本人の各世代の中に芸術的、詩的世界への渇望というべきものが近来とみに強まり、…　(田中 2010 :p.85(6))

以上が田中 (2010) で前件 X について述べられていることであり、グループ KANAME と同様に本稿で問題とされる点については述べられていない。

2.3.3. 藤田・山崎 (2006)

藤田・山崎 (2006) は新聞データを用いて、出来事の連動を表す複合助詞「～につれて」の前件 X の品詞分布を整理している。藤田・山崎 (2006) によれば、名詞より動詞の比率

の方が圧倒的に高く、動詞が 379 のデータのうち約 90%の 340 を占める。また、出来事の連動を表す複合助詞の前件の語を『分類語彙表』の意味分類によって分布を調べた結果、特に、進退・時間・上がり、下がりなどを意味する〈作用〉の分類は約半分がデータの中に出現しており、前件の意味的中心は「作用」を表すものであると結論付けている。

藤田・山崎ではデータをもとに、複合助詞が前件 X として動詞句と名詞句をとる割合を整理しているが、これもグループ KANAME、田中と同様に本稿の問題点には触れていない。

次節では、これまで整理してきた先行研究を踏まえ、本稿の問題点を再度確認する。

2.4. 本稿の問題の位置付け

ここまで、「～とともに」「～につれて」についての先行研究を見てきた。2.3 でまとめたように、先行研究ではこれらの複合助詞が名詞句より動詞句に接続する例が多いことは指摘されている。しかし、同じ名詞句に接続していながら(1)や(2)のように容認度の差が生じることは説明できない。同じ名詞句に接続する場合であっても、文の容認度はひとくくりにまとめることはできないということが本稿での主張である。

本稿では、漢語名詞を２語用いた漢語複合名詞に接続する形に着目し、「～とともに」は前件として「人口増加、技術進歩」のように「N NV」となる漢語複合名詞も、「人口の増加、技術の進歩」のように「N の NV」となる漢語複合名詞もとることができることに対し、「～につれて」は「N NV」漢語複合名詞は「N の NV」漢語複合名詞と比較し、容認度が下がると主張する。更に、そのような容認度の違いが生じる要因として、同じ名詞句の中でも「N の NV」漢語複合名詞は動詞、「N NV」漢語複合名詞は名詞に近い働きがあるのではないかと論じる。

(22) a. 人口の増加{とともに／につれて}街がにぎやかになる。
　　 b. 人口増加{とともに／??につれて}街がにぎやかになる。

(23) a. 技術の進歩{とともに／につれて}生活が便利になる。
　　 b. 技術進歩{とともに／??につれて}生活が便利になる。

しかし、この容認度の差には個人差も見られ、自明のものと見なすことはできない。そこで､容認度の差が存在することを確かめるために､容認度を測るアンケート調査を実施し、分析した。以下、その調査と議論を行っていく。

3. 調査

3.1. 目的

2 節までで論じたとおり、本論文では、出来事の連動を表す複合助詞「～とともに」は前件として「N NV」となる名詞句も、「N の NV」となる名詞句もとることができるのに対し、「～につれて」は「N の NV」に接続する場合と比較して、「N NV」に接続する場合のほうが容認度が下がると主張する。このような容認度の違いが、日本語話者の直観として実際に存在するということ確かめるのが、調査の目的である。

3.2. 調査に用いた文

本調査で調べたいのは、複合助詞の種類がどれであるかという要因と、複合助詞が接続する前件がどのような形をしているかという要因の間の相関である。複合助詞の種類は(24)の 3 つ、複合助詞の前件の形は次の 4 種類を考えた。

(24) 要因 1：複合助詞の種類
　 a. 「～とともに」
　 b. 「～につれて」
　 c. 「～にしたがって」

(25) 要因 2：前件

a.	名詞＋助詞「の」＋動作名詞	「N の NV」	（例：「人口の増加」）
b.	名詞＋動作名詞	「N NV」	（例：「人口増加」）
c.	名詞＋助詞「が」＋NV する	「N が NV する」	（例：「人口が増加する」）
d.	名詞＋助詞「が」＋非サ変動詞	「N が V」	（例：「人口が増える」）

(24)と(25)の要因を組み合わせた 12 パターンのそれぞれについて 5 種類ずつ､計 60 文を作成して調査に使用した。

(24)の要因のうち、本研究が注目するのは「～とともに」「～につれて」の 2 形式であるが、参考のためにこれら 2 形式と類似した意味を持つとされる「～にしたがって」も調査した。同様に、(25)の要因のうち注目したいのは「N の NV」と「N NV」であるが、作成した文の意味が自然であることを確認するために、前件が「N が V」「N が NV する」である文も調査対象とした。

(26) N の NV 条件：
　　技術の進歩{とともに／につれて／にしたがって}生活が便利になる。

(27)　N NV 条件：

技術進歩{とともに／??につれて／にしたがって}生活が便利になる。

(28)　N が V 条件：

技術が進む{とともに／につれて／にしたがって}生活が便利になる。

(29)　N が NV する条件：

技術が進歩する{とともに／につれて／にしたがって}生活が便利になる。

実験文とその容認度をまとめた表を付録に掲載する。

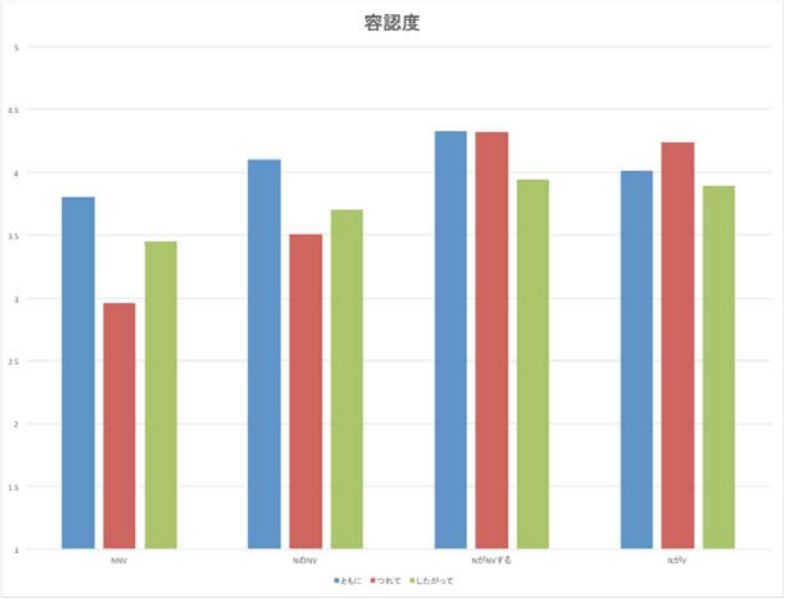
3.3. 実験の方法

実験方法はオンライン上、あるいは質問紙を用いたアンケート方式で行った。作成した文を、ランダムに並べ、文の容認度を 5 段階（1　完全に不自然　2　不自然　3　どちらでもない　4　自然　5　完全に自然）で評価し、1 つを選択させた。調査は日本語話者の大学生・大学院生 15 人を対象として行った。

3.4. 結果

実験の結果、「～とともに」「～したがって」は被験者分析において、複合助詞の種類と前部要素の種類の主効果がともに有意であり有意差はなかった（すべて $p<.01$）が、「～につれて」は有意差があった（すべて $p>.01$）。また、交互作用が有意であったため、下位検定を行った。自由度が 1 より大きい反復測定を含む分散分析では、球面性の仮定からの逸脱を補正するために、球面性の検定が有意であった被験者内要因について Greenhouse - Geisser の ε による調整を行った。多重比較には、Shaffer の方法を用いた。

次のページに実験結果のグラフを掲載する。



3.5. 考察

調査の結果より、本稿で取り扱う「～とともに」「～につれて」の２つの複合助詞において、「～とともに」は前件にくる品詞の違いで有意差はでなかったが、「～につれて」は「N NV」漢語複合名詞が前件にくる場合と「N の NV」漢語複合名詞が前件にくる場合に明らかな違いがでた。このことから本稿の(3)の主張が明らかになった。

(3) 前件として「N NV」をとる場合は容認されにくいが、「N の NV」をとる場合容認されやすい。

(再掲)

4. 議論

4.1. 主張

3 節では容認度調査を行い、(3)の主張を明らかにした。
この結果を受けて、本節では次の(4)の主張について論じる。

(4) (3)のような容認度の違いが生じるのは、「N の NV」漢語複合名詞は動詞に近い性質を持ち、「N NV」漢語複合名詞は名詞的性質が強いためである。(再掲)

4.2. 根拠となる先行研究

本稿の(4)の主張の根拠として影山 (1993) を取り上げる。

4.2.1. 名詞化

影山は、「N の NV」漢語複合名詞から「N NV」漢語複合名詞[1]への転換について論じる中で、「N NV」漢語複合名詞は「「N の NV」漢語複合名詞と比較し、名詞的であることを示唆している。

通常の動詞は時制屈折と結び付かねばならないが、日本語の文構造は VP の外側に時制屈折をとる形式であるため、動詞編入によって最終的に時制屈折と融合する。動詞と時制の融合が「N NV」構造までの段階で起こるとすると、「N NV」構造は動詞と時制が融合した後で適用することになるが、屈折は語彙範疇ではなく機能範疇に属し、語という単位で閉じてしまう働きをもつため、「N NV」構造に適用できないとしている。しかし、この影山の提案は次の(30)の例文のように、動名詞が直接時制屈折を伴っていないにも関わらず、複合化が成り立たないなど記述的に不十分であると述べる。

[1] 影山 (1993) では S 構造複合語と呼んでいるが、ここでは統一して「N NV」漢語複合名詞と呼ぶ。

(30) a. 法律の改正をする。
a'. *[法律：改正]をする。
b. カメラマンがたまたま浅間山の爆発を目撃した。
b'. *たまたま[浅間山：爆発]を目撃した。

(影山 1993 :p..249(156))

影山は(30)の例で重要なのは、動名詞の意味合いであるとし、次のような例を挙げている。

(31) a. [浅間山：爆発]のニュースが報道された。
b. 私立大学は大幅な[受験生：減少]を覚悟しなければならない。

(影山 1993 :p.250.(157)

(31)は、特定の出来事の事実を述べているため陳述度が低いが、(30)の動名詞は既成事実を提示するのではなく、これから行おうとする行為を描写しているため陳述度が高いといえる。影山は「N NV」漢語複合名詞が時間やアスペクトを表す名詞の補文として使われるのは、動名詞だけでは事実提示に終わるものを、時間名詞によって陳述的意味合いを付け加えるためであると考え、よって、「N NV」漢語複合名詞は名詞的概念を作る操作であるため時制屈折や陳述性の主動詞を拒む結果になると考えられるとする。

影山は、「N NV」漢語複合名詞は「N の NV」漢語複合名詞と比較し名詞的であることを示唆するにあたって、「N の NV」漢語複合名詞から「N NV」漢語複合名詞への転換の条件として「時制をもたない」という条件を指摘している。その根拠として、次の(32)のように形容名詞の複合化が適用することを証明した上で、動名詞と形容名詞の共通点として、編入の母体となる述語が時制屈折を伴わないという点が挙がることを主張する。

(32)形容名詞の複合化の例
a. 入れ歯に特有のしつこい汚れ→[入れ歯：特有]のしつこい汚れ
b. 日本語に固有の特徴→[日本語：固有]の特徴
c. 審議が不十分につき、、、→[審議：不十分]につき、、、

(cf.影山 1993 :p.241.(130)

(33) 若者に人気のスポーツカー
→*[若者：人気]のスポーツカー

(影山 1993 :p.241.(132)

(32a)「特有」や(32b)「固有」と、(33)「人気」の相違を、前者が形容名詞であり、述語と

してその項に格を付与するのに対し、後者が単純な名詞であるという点であると述べ、(32)の例文が単純な格助詞の省略ではなく複合化であることを示唆しているとする。

また、複合化の特徴である、主要部が句排除される制約を例文(34)で、統語的であることを例文(35)、(36)で証明することで、形容名詞の複合化が可能であることを示している。(35)では、被編入項に修飾語が付く可能性があること、(36)では、文中の照応に参加することが可能であることを示唆している。

(34)主要部が句排除される制約をもつことを示す例

a. 新空港は、実現が困難または不可能になる可能性が出てきた。
→*新空港は、[実現：[困難または不可能]]になる可能性が出てきた。

b. 審議が極めて不十分のため、、、
→*[審議：[極めて不十分]]のため、、、

(影山 1993 :p.242.(133)

(35)統語的であることを示す例①

a. [閉鎖的な日本社会：特有の]、、、

b. [完全な修復：困難]な損傷

(影山 1993 :p.242.(135)

(36)統語的であることを示す例②

a. この[関西：特有]の現象は、そこに住む人にとってはごく自然なものである。

b. 顔に塗料を塗るという風習は、決して[その種族：特有]のものではない。

(影山 1993 :p.242.(136)

影山はこれまでの観察から、次の(37)の各組を比較し、(a,b,c,)と(a',b',c')の違いは時制の有無だけであり、時制を持つ(a',b',c')では複合化が適用できないとする。

(37) a. 生活協同組合に[加入：希望]の方は、、、

a'. *生活協同組合に[加入：希望する]方は、、、

b. 会議には[ネクタイ：着用]のこと。

b'. *会議には[ネクタイ：着用する]こと。

c. 外国製品を購入の際は、アフターケアに注意しなければならない。
→[外国製品：購入]の際は、、、

c'. 外国製品を購入する際はアフターケアに注意しなければならない。
→*[外国製品：購入する]際は、、、

(影山 1993 :p.242-243.(137)

以上から、「N の NV」漢語複合名詞から「N NV」漢語複合名詞への転換の条件として「時制をもたない」という条件を主張し、この主張をもとに、「N NV」漢語複合名詞が名詞的概念を作る操作であるから時間屈折や陳述性の主動詞を拒むということを提案している。

4.3. 緊密性

次に、主張の根拠として「N NV」漢語複合名詞の緊密性に着目し、「N の NV」漢語複合名詞との相違を指摘する。

影山 (1993) は、語という単位は句や文と異なる特別なまとまりを形成しており、語の内部の要素を代名詞で指したり、文レベルの規則で削除したりすることはできない(語彙照応の制約)と述べている。例えば、(38a)の指示語「それ」も(38b)の指示語「それ」も「金魚」を指しているが、(38b)は「金魚すくい」という複合語であるため、その一部である「金魚」を指示語「それ」で指すことはできず、容認できない。

(38) a. せっかく金魚をすくったのに、金魚が逃げてしまった。
→ せっかく金魚をすくったのに、それが逃げてしまった。

b. せっかく金魚すくいをしたのに、金魚が逃げてしまった。
→ *せっかく金魚すくいをしたのに、それが逃げてしまった。

(影山 1993: p.11)

同様に、「N の NV」漢語複合名詞の N 部分と「N NV」漢語複合名詞の N 部分を指示語「それ」に置き換えた(39),(40)でも、語としての緊密性が弱い「N の NV」漢語複合名詞は容認できるが、緊密性が強い「N NV」漢語複合名詞は容認できない。

(39) a. 人口の増加{とともに／につれて}街がにぎやかになる。
→ それの増加{とともに／につれて}街がにぎやかになる。

b. 人口増加{とともに／??につれて}街がにぎやかになる。
→ *それ増加{とともに／につれて}街がにぎやかになる。

(40) a. 技術の進歩{とともに／につれて}生活が便利になる。
→ それの進歩{とともに／につれて}生活が便利になる。

b. 技術進歩{とともに／??につれて}生活が便利になる。
→ *それ進歩{とともに／につれて}生活が便利になる。

このことから代名詞に置き換えることができない「N NV」漢語複合名詞は 1 つの名詞とし

てのまとまりが強く名詞に近い性質をもち、代名詞に置き換えることができる「N の NV」漢語複合名詞は 1 つの名詞としてのまとまりが弱く、動詞に近い性質をもつと考える。

4.4. 本節のまとめ

本節では、影山 (1993) の次の(41)の提案と(42)の主張を、本稿の(4)の主張の根拠として示した。

(41) 「N NV」漢語複合名詞は「「N の NV」漢語複合名詞と比較し名詞的である。 (再掲)

(42) 「N NV」漢語複合名詞は 1 つの名詞としてのまとまりが強く名詞に近い性質をもち、代「N の NV」漢語複合名詞は 1 つの名詞としてのまとまりが弱く、動詞に近い性質をもつ。 (再掲)

(4) (3)のような容認度の違いが生じるのは、「N の NV」漢語複合名詞は動詞に近い性質を持ち、「N NV」漢語複合名詞は名詞に近い性質を持つためである。 (再掲)

5. まとめ

本稿では、(1),(2)のような漢語複合名詞に接続する出来事の連動を表す複合助詞「～とともに」「～につれて」について、(3),(4)の主張をする。

(1) a. 人口の増加{とともに／につれて}街がにぎやかになる。
b. 人口増加{とともに／??につれて}街がにぎやかになる。 (再掲)

(2) a. 技術の進歩{とともに／につれて}生活が便利になる。
b. 技術進歩{とともに／??につれて}生活が便利になる。 (再掲)

(3) 「N NV」漢語複合名詞に接続する場合は容認されにくいが、「N の NV」漢語複合名詞に接続する場合容認されやすい。 (再掲)

(4) (3)のような容認度の違いが生じるのは、「N の NV」漢語複合名詞は動詞に近い性質を持ち、「N NV」漢語複合名詞は名詞に近い性質を持つためである。(再掲)

複合助詞「～とともに」「～につれて」についてのグループ KANAME (2007) 、田中 (2010) 、藤田・山崎 (2007) の先行研究は、どれも動詞句接続と名詞句接続の対立を述べており、同じ名詞句接続間での容認度の差は述べられていなかった。本稿では、名詞句の中でも「N の NV」漢語複合名詞と「N NV」漢語複合名詞に接続する複合助詞に着目し、その容認度の差を明らかにするとともに、要因を漢語複合名詞の性質に結論付けることを提案した。

6. 参照文献

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京：ひつじ書房

グループ KANAME (2007) 『複合助詞がこれでわかる』東京：ひつじ書房

砂川有里子 (1987) 「複合助詞について」『日本語教育 62 号』日本語教育学会, pp.42-55.

田中寛 (2010)『複合辞からみた日本語文法の研究』東京：ひつじ書房

藤田保幸、山崎誠 (2006) 「新聞記事データに見る「につれて」「にしたがって」」『複合辞研究の現在』大阪：和泉書院, pp.103-112

Greenhouse, S. W., & Geisser, S. (1959). On methods in the analysis of profile data. *Psychometrika*, 24, 95–112.

Shaffer, J. P. (1986) Modified sequentially rejective multiple test procedures. *Journal of the American Statistical Association*, 81, 826-831.

7. 謝辞

本論文を執筆するにあたり、担当教員の上山あゆみ先生には、ご多忙の中大変丁寧にご指導頂きました。この場を借りて深く感謝申し上げます。また、九州大学言語学研究室の田村さんには、お忙しい中、最後の最後まで大変貴重なアドバイスを、矢野さんには、調査の分析方法のアドバイスを頂きました。心より感謝いたします。本当にありがとうございました。

8. 付録

容認度	1	2	3	4	5	合計ポイント
						合計人数
(1)技術の進歩とともに生活が便利になる。	0%	6.67%	13.33%	46.67%	33.33%	4.07
	0	1	2	7	5	15
(2)技術進歩とともに生活が便利になる。	6.67%	13.33%	6.67%	33.33%	40%	3.87
	1	2	1	5	6	15
(3)技術の進歩につれて生活が便利になる。	0%	20%	20%	13.33%	46.67%	3.93
	0	3	3	2	7	15
(4)技術進歩につれて生活が便利になる。	13.33%	40%	13.33%	20%	13.33%	2.8
	2	6	2	3	2	15
(5)技術の進歩にしたがって生活が便利になる。	6.67%	13.33%	6.67%	33.33%	40%	3.87
	1	2	1	5	6	15
(6)技術進歩にしがって生活が便利になる。	6.67%	20%	26.67%	13.33%	33.33%	3.47
	1	3	4	2	5	15
(7)地位の向上とともに待遇が良くなる。	0%	0%	33.33%	40%	26.67%	3.93
	0	0	5	6	4	15
(8)地位向上とともに待遇が良くなる。	0%	13.33%	20%	40%	26.67%	3.8
	0	2	3	6	4	15
(9)地位の向上につれて待遇が良くなる。	0%	33.33%	20%	26.67%	20%	3.33
	0	5	3	4	3	15
(10)地位向上につれて待遇がよくなる。	26.67%	20%	13.33%	20%	20%	2.87
	4	3	2	3	3	15
(11)地位の向上にしたがって待遇が良くなる。	6.67%	20%	13.33%	26.67%	33.33%	3.6
	1	3	2	4	5	15
(12)地位向上にしたがって待遇が良くなる。	14.29%	21.43%	21.43%	21.43%	21.43%	3.14
	2	3	3	3	3	14
(13)年齢の上昇とともに体力がおとろえる。	0%	13.33%	20%	13.33%	53.33%	4.07
	0	2	3	2	8	15
(14)年齢上昇とともに体力がおとろえる。	0%	26.67%	13.33%	33.33%	26.67%	3.6
	0	4	2	5	4	15
(15)年齢の上昇につれて体力がおとろえる。	20%	20%	13.33%	20%	26.67%	3.13
	3	3	2	3	4	15
(16)年齢上昇につれて体力がおとろえる。	20%	20%	20%	26.67%	13.33%	2.93
	3	3	3	4	2	15
(17)年齢の上昇にしたがって体力がおとろえる。	0%	6.67%	26.67%	33.33%	33.33%	3.93
	0	1	4	5	5	15
(18)年齢上昇にしたがって体力がおとろえる。	0%	20%	26.67%	26.67%	26.67%	3.6
	0	3	4	4	4	15
(19)人口の増加とともに街がにぎやかになる。	0%	13.33%	0%	53.33%	33.33%	4.07
	0	2	0	8	5	15
(20)人口増加とともに街がにぎやかになる。	0%	13.33%	26.67%	13.33%	46.67%	3.93
	0	2	4	2	7	15
(21)人口の増加につれて街がにぎやかになる。	0%	26.67%	13.33%	33.33%	26.67%	3.6
	0	4	2	5	4	15
(22)人口増加につれて街がにぎやかになる。	13.33%	26.67%	26.67%	13.33%	20%	3
	2	4	4	2	3	15
(23)人口の増加にしたがって街がにぎやかになる。	14.29%	14.29%	28.57%	21.43%	21.43%	3.21
	2	2	4	3	3	14
(24)人口増加にしたがって街がにぎやかになる。	0%	6.67%	40%	26.67%	26.67%	3.73
	0	1	6	4	4	15
(25)時間の経過とともに痛みが和らいできた。	0%	6.67%	6.67%	26.67%	60%	4.4
	0	1	1	4	9	15
(26)時間経過とともに痛みが和らいできた。	0%	20%	20%	20%	40%	3.8
	0	3	3	3	6	15
(27)時間の経過につれて痛みが和らいできた。	6.67%	20%	6.67%	46.67%	20%	3.53
	1	3	1	7	3	15
(28)時間経過につれて痛みが和らいできた。	0%	46.67%	6.67%	26.67%	20%	3.2
	0	7	1	4	3	15
(29)時間の経過にしたがって痛みが和らいできた。	6.67%	0%	33.33%	20%	40%	3.87
	1	0	5	3	6	15
(30)時間経過にしたがって痛みが和らいできた。	13.33%	33.33%	6.67%	20%	26.67%	3.13
	2	5	1	3	4	15